



四国防災八十八話

第八十三話 おそろしかった3日間

監修・著作：愛媛大学防災情報研究センター

作画：豊嶋 英華（愛媛大学美術研究会）

これは、昭和51年、当時小学校5年生だった私が体験した、台風災害の話です。

9月の初め、私達一家の住む香川県小豆島町は、台風17号の影響で、連日大雨が降り続いていました。

明け方、近所のおじさんが、

**“上流の公民館が流れてくるぞー！！
はよう、逃げー”**

と、大声で知らせてきました。



**“2人は先に、
黒島のおばちゃんの家へ逃げなさい。
お父さんと、お母さんも後で行くから。
気を付けるんよ”**

母が、私と姉に言いました。

**私達は、ただ飼っていた犬2匹を抱いて、
大雨の中を走り出しました。**

**停電で、街灯が消え、辺りは真っ暗な上、
雷のゴロゴロと鳴る音が響いて、
恐ろしさで、私も姉も無我夢中で走りました。**



バッシューン

何かにつまづいて、
私は転んでしまいました。
打った膝や手がジンジンと痛みます。

“何しよん、早う立ち！
ほら、行くよっ！！”

先を走る姉が、私に叫びました。

いつも優しい姉の、厳しい口調に、
私は驚いてすぐに立ち上がり、
また走り出しました。



翌日になると、
雨が少し小降りになっていたので、
私と姉と父は、
大事な荷物を取りに家に戻りました。

すると、私達の家は、膝上の高さまで、
雨水と泥が入り込んでいて、
家の中の物が、水にフカフカ浮いている
状態でした。

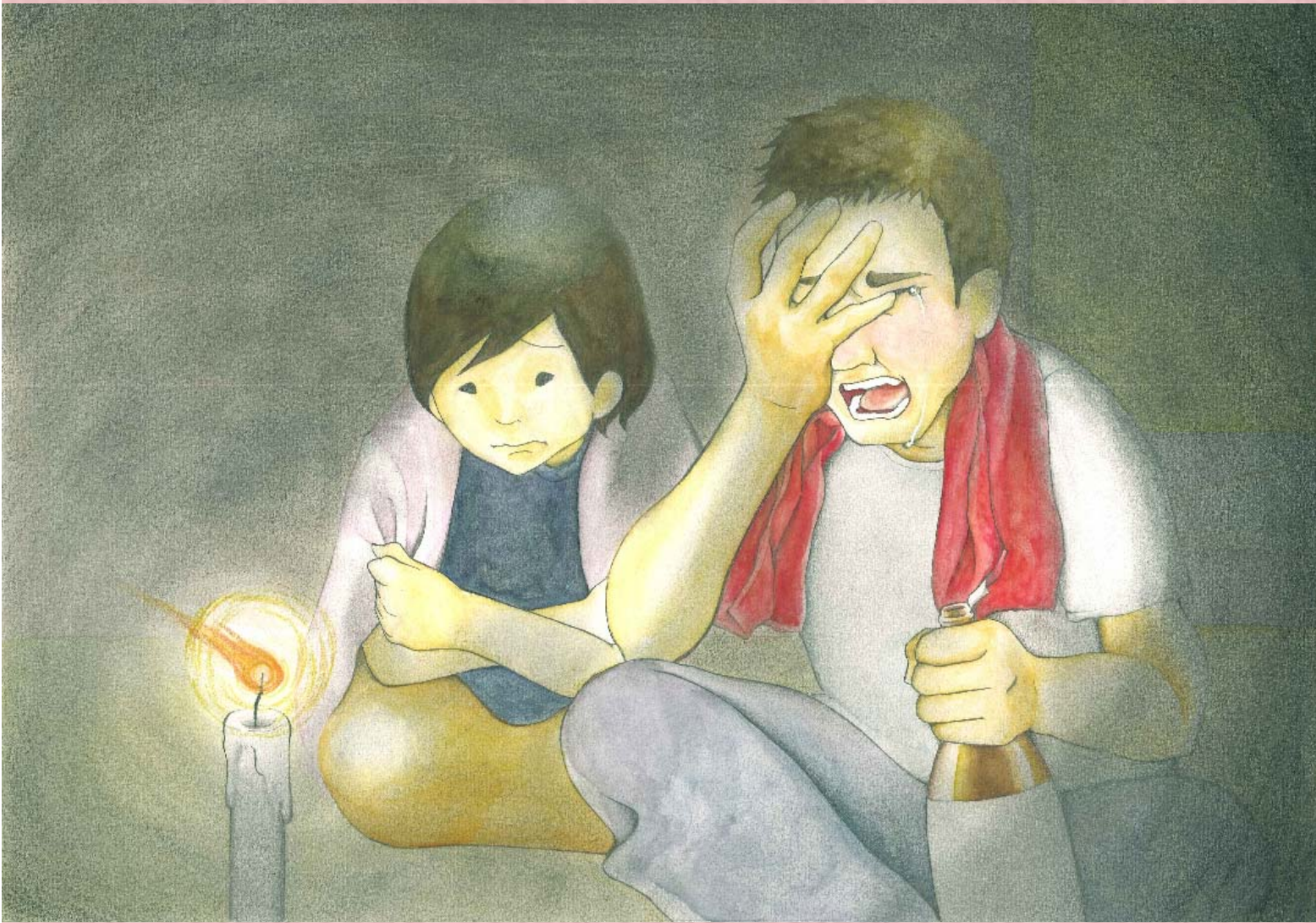
とりあえず、必要な物を持って、
また、おばさんの家に向かいました。



夜、ローソクの火を囲んで座っていても、みんな表情は暗く、大人達の口からは、死ぬことしか出てきませんでした。

外では、強い風が吹いていて窓などに当たって、ガタガタとずっと音がしていました。

“もう最期だから、賑やかにいかんか？
酒でも飲もうや”



父は、お酒をたくさん飲みながら
泣いていました。

“どうせ死ぬんやったら、
酒飲んで、ぐっすり寝ているうちに
死にたい。
苦しみながら、死にたくない。”

そんな会話が、一晩中続いているようでした。



私と姉は、隣の部屋で横になっていましたが、全然、眠ることはできませんでした。

姉は、

“どうせ死ぬんだったら、
きれいな格好で死にたい”

と言って、よそ行きの服に着替えます。

私は、布団をかぶって、

“まだ死にたくないよー！！
神様、助けて……”

と必死に祈りました。



祈りが天に通じたのでしょうか。
翌朝、雨は上がり、青空が広がりました。
台風は去ったのです。

“生きてる！助かったんだ！”

“良かった、良かった”

皆、口々に喜び合いました。

多くの家が、浸水し、
流されたり、潰れたりしました。
亡くなった方も多数いました。

今思い出しても、本当に恐ろしい3日間でした。